

『礮卦』解説

前川 捷三

<資料>表紙に『礮卦 全』と墨書する。書名は「ほうか」と読む。礮は砲の字と同じで、礮の形もある。写本、一冊。上下二箇所をこよりで留めて袋綴じにしている。全十六丁。朱で句点を加えている。本の大きさは縦約24糎、横約15.5糎。

<著者>叙の末尾に「嘉永壬子陽月象山平戠子明書于江都所居求是室」とある。佐久間象山(号。戠は啓の俗字、彼の名)の著作。

象山は文化八年(西暦1811年)信州松代に生まれる。儒学を修め、洋学をも摂取した。江戸に出て塾を開き、西洋砲術を勝海舟や吉田松陰などに教えた。開国と公武合体を唱え、元治元年(1864)京都で尊皇攘夷派の凶刃に斃れた。

嘉永壬子陽月は嘉永五年(1852)陰曆十月。象山の「山寺源大夫に贈る」(信濃教育会編、信濃毎日新聞社発行『増訂象山全集』巻四書簡四三五)に「……此間少しく感ずる所有之夏中撰し候礮卦の傳と後記と申ものを認め申候。……」(ママ)とあり、同年の夏から江戸の求是室で執筆していたものが、この時一応の完成を見たのである。

<解説>五経の一つ『易経』には六十四の卦がある。一卦は陰を表す--(陰爻)と陽を表す-(陽爻)を組合わせた六爻から成る。六爻が下から順に陽(初九)・陽(九二)・陰(六三)・陽(九四)・陰(六五)・陽(上九)の卦☰は、『易経』では睽卦と定められている。象山は、この卦の象を砲身と見、初九は尾珠(ヲダマ)、九二は當(ソコ)、六三は火門(ヒグチ)、九四は肘(ウデガネ)、六五は口(スグチ)、上九は首(カシラ)に当たるとした(各部位の和名は『増訂象山全集』巻四書簡四五三による)。そして、これを礮卦と呼び、『易経』に倣って卦辞、爻辞、彖辞、大象、小象とその伝(解説)を作成した。象山は東洋の古典を借りて西洋の技術(砲術)を論じ、海防の時務策を提唱したのである。

象山の『省譽録』に「予が礮卦の著、但だ武學の生徒に益有るのみならず、兼ねて國家の武備に裨有り。往日、官の其の鑄版を阻みしは、吾れ其の何の意たるかを知らず。」(原漢文)とあるように、徳川幕府はこの著作に出版の許可を与えなかった。そこで門人等により手写されて世に伝わった。また、『増訂象山全集』所収の『礮卦』には編者の前書として「本文原稿は長谷川五作氏蔵の版下本に據れり。但此の本には紋文を缺けるが故に他の寫本より異なる兩様の紋を補ひたるものなり。」と記されているし、山寺源大夫に宛て「礮卦草稿其後數箇所改め候處御座候に付申上候」(巻四書簡四四五)と七箇所につき文辞を改変、増補すべきことを求めてもいる。

菅文庫の『礮卦』を『増訂象山全集』と比較すればその異同を知ることができる——例えば二様の叙の中、前者と近く、後者とは相違が甚だしい。この作業や山寺所持草稿の改変増補部分の比較などを通して、『礮卦』が初稿からどのように改変されたか推定することが可能となるであろう。

(本学教育学部教授)